

戦後 80 年、石井記念友愛社と自分の宿命

園長 児嶋 草次郎

地球の歴史 46 億年 人類の歴史 30 万年に比べたら
戦後 80 年なんて ほんの一瞬なのかもしれない
私は昭和 24 年生まれだから 戦後の歴史をほぼ一緒に生きてきた
地球から見たら 取るに足らない一瞬の瞬きかも知れない
でも私にとっても石井記念友愛社にとっても 大事な 80 年だった

私の人生のほぼすべては この茶臼原の大自然とともにある
茶臼原の人々と共にある 友愛園の子ども達とともにある
家族とともにある 自然 人々 子ども達 家族に感謝
私が生まれたのは静養館 石井十次の亡くなった館だ
元々は岡山で宣教師の住まい 孤児院の園舎だった

敗軍の父が昭和 20 年 10 月 孤児救済を再開し ここが私の家となった
幼児のころは 孤児である施設の子ども達を兄姉として育った
新設の小学校には 開拓地の多くの子ども達が通ってきていた
みんな土塊のように貧乏で 園の子ども達と変わらなかった
中学校はこの台地から下りたところにあり 昔からの商店が並んでいた

高校は海の近くの町にあり 人の多い町の本屋は 田舎人には眩しかった
大学は大東京に出かけて行った 道を聞けなく 毒虫のように街を放浪した
ヘルメットと角材の学生たちに引け目を感じ 蛹のように閉じこもった
なんとか卒業して 1 年間北海道の遠軽の施設で修業しなおした
そしてこの茶臼原に帰り 再び子ども達との共同生活が始まった

家庭復帰はほとんどなく 社会に自立させることが使命となった
自らにも厳しかったけど 寝食を共にし厳しく向き合った
子ども達は高度経済成長期の戦士として たくましく自立していった
時を重ね 失敗もし 自分が大人として何も知らないことに気づかされた
石井十次の歴史文化について学び始めて 視野も開け 少し余裕ができた

『一人ひとりが十次となって志を引き継いでほしい』
その十次の遺言に出会って この茶臼原の歴史を見直すことにした

この地に生きる人々によって その歴史文化は引き継がれたのだ
志は一代二代くらいで形となるものではないのだ 道は続く
ようやく自分達にも子ども達にも 十次の魂が流れていると感じた

そう自覚できるまでに 80年と言う年月が必要だったのだろう
石井十次の魂は この地で永遠に生き続けていくのだろう そうあってほしい
子ども達一人ひとり 何かの力によってここへ導かれたのだ そう思おう
その宿命を受け入れ 歴史文化と魂の交流を通して 運命を変えよう
世のため人のために働く志を持って 自信を持って 未来に挑戦しよう

暑中お見舞い申し上げます。日本各地で40度を超す猛暑が続いていますが、皆様、お元気で過ごしのことと思います。くれぐれもご自愛ください。

友愛社のそれぞれの草木は、手入れが大変ですが、それぞれの場所で必死に生きています。今年はどういうわけかナス、ピーマンの生育状況がよく、みんなで支柱たてや誘引などをがんばっています。子供たちも暑さに負けず元気で、特に女子は、8月1日に行われた県内の施設対抗バレーボール大会で優勝し、鹿児島で行われる九州大会に出場できることになりました。うれしいニュースです。

さて、まもなく8月15日の終戦記念日がやって来ます。戦後80年ということで、新聞、テレビ等で記念の特集も組まれたりしています。何らかの形で戦争に直面した方々も、80歳代後半以上になって来て、いずれ、日本人は戦争を知らない人ばかりになっていくのでしょうか。

現在、ウクライナや中東で戦争が行われていますが、日本と言う国が戦争に向かって歩み始めなければよいがと、この頃気になって仕方ありません。人間はなぜこうも殺し合いを繰り返すのでしょうか。世界の情報が錯綜し、国どうしの力関係も混沌として来ました。政治家の方々は、判断を誤らないように切に願います。

『国や行政のやることが正しいとは限らない。』

子供たちの未来作りに携わるものとして、最近の情勢は人間を悲観的にしています。そうであってはならないのですが。

石井記念友愛社は、80年前、太平洋戦争で親を失った子供たちの救済のために石井十次記念の事業としてスタートしています。石井十次の弟子とも言ってもよい柿原政一郎氏が8月、広島で原子爆弾を浴びかろうじて助かった後、おそらく多くの残された孤児たちの姿を目の前にして、石井十次の救済事業の再開の必要性を強く感じたに違いありません。

柿原氏は72歳の時、自分の人生を振り返って次のように書いておられます。(昭和30年8月2日宮崎日日新聞)

「終生を社会事業と社会問題とに投入した。時々政治的線路内に迷い込むこともあるが、私自身は終始一貫社会問題と取り組んでいるつもりだ。」

柿原氏が広島で原爆を浴びた頃、父児嶋虜一郎は、岡山連隊の一兵卒として高鍋で米軍上陸を想定した「本土決戦」に備えていました。

そして8月15日を迎えます。無条件降伏でした。

その頃柿原氏は事業経営者でしたので、自らが救済事業のために動くこともできず、その必要性を父嶋一郎に何らかの形で訴え、説得したものと思われます。原爆による広島の惨状はまさに生き地獄だったと思います。柿原氏が若き時、石井十次の命で大阪の貧民窟にもぐりこんで、セツルメントを

やっていた時を思い出したことでしょう。子供たちを救うことが、未来づくりの始まりなのです。

その説得の資料は今のところ見つかりませんが、『孫が生まれたという電報にうなづいて石井十次は亡くなった』というような歴史的事実は、説得の材料に使われたことでしょう。父もノモンハン等でのロシアとの激戦に参戦し、地獄を体験して来ていますので、決断は早いものでした。供に戦いながら亡くした多くの戦友のためにも、新たな国づくりはまず迷える子供たちを救うことからと、自分なりに整理したのでしょう。

『日本の未来は子供たちの教育にかかっている。』

この茶臼原に上り 10 月には救済事業を始めています。自らの宿命と感じたのでしょう。

敗戦から 80 年と、児童救済 80 年とが重なることを、私たちはどう評価すべきなのか。

国土が焦土と化し、食料もなく、自らの家族が生きていくことさえ難しい時に、他人の子供を何人もあずかる。なんとか食いつないで命を維持しながら、集団生活を通し未来に向けて生活習慣を身につける。そして学び、社会へ向けて自立のための知恵や技術を習得していく。

日本がある程度経済的に立ち直り、平和な日々の中で福祉事業を立ち上げるのとは、全然次元が違います。今戦争が行われているウクライナやガザ等で救済活動をするのと、その使命感・緊迫感はそう変わらないでしょう。

私たちの先人たちは、自分の家族をも同じ運命共同者として、支援を必要とする子供たちを受入れ、寝食を供にしながら未来を切り開こうとしたのです。80 年を振りかえる時、まずその原点を思い浮かべなければならないでしょう。

『戦争は常にドアの向こうにある。』

この 80 年、日本は戦争にまきこまれることなく平和を維持できて来ました。これから 100 年、150 年と平和が続くように、祈りまた緊張感を持って活動していかなければなりません。

さて、今年の「石井十次セミナー」について案内させていただきます。

昨年のセミナーでは、児嶋虜一郎生誕 110 年、それに続けて今年の石井記念友愛社創立 80 周年を記念して、戦後の石井記念友愛社の歴史を、元福岡県立大学教授田代英美先生と、同じく福岡県立大学教授の佐野麻由子先生に検証していただきました。地域とともに歩んで来た石井記念友愛社の歴史を、客観的に振り返ることができた気がします。

特に田代先生が児嶋虜一郎の考える児童養護事業の目標を資料の中から次のように引き出してくださったことは、私たちにとって、重要な再発見となりました。

「児童は児童の間のみ、幸福であればよいのではない。将来も幸福で有り得、その営む家庭生活も幸福であり、この社会の一員として落伍することなく自己の生活をきづき得ること（昭和 28 年度）。」

「生産（労働）、教育、娯楽、消費の各部分を統一的に取り入れて子どもの人格を形成・再建設する（昭和 45 年度）。」

以上の言葉は、現代においても貧困の連鎖を断つためにも、しっかり私たちの頭の中に刻んでおかねばなりません。今の児童福祉の方策は、この時期から随分離れてしまったように感じます。「平和ボケ」と言いますか、永遠に平和と繁栄が続くことしか考えてないのでしょうか。今年のセミナーにおいては、同じく田代先生に、資料や蔵書類を調査する中で見えて来た児嶋虜一郎の人間性について語ってもらいます。九州大学で哲学を学ばれた田代先生は、常に冷静に父の言葉を分析され、先生の価値観と共鳴し合う部分もあるように私には感じられ、無理にお願い致しました。東京大学で東洋史を学んだ父の世界観は、私など凡人には推し量ることはできません。石井十次日誌を全巻（33 巻）活字化して出版するなんてことは、並の大学教授でもできないことでしょう。

次に今年の基調講演は、公益財団法人大原芸術財団事務局長森川政典氏に、「新生『大原芸術財団』のめざすもの」という題で話していただきます。石井十次の支援者大原孫三郎氏の事業は倉敷紡績だけではなく、銀行や水力発電など多岐にわたりますが、文化・社会事業にもその領域を広げ、その一つが大原美術館です。大原家の奨学生であった児島虎次郎が、西洋留学中に、「日本の若い画家たちに西洋絵画の実物を見せたい」という思いで集めた絵画等をもとに、大原氏が作ったのが「大原美術館」なのです。昭和5年（1930）、日本の初の私立西洋美術館として設立されています。

大原氏の播いた種がそれぞれに育っている状況の中で、岡山孤児院は一度解散しています。敗戦を機に事業を再開（この時、父嶋一郎は孫三郎氏の子、大原総一郎氏にも支援を受けています）し、なんとかここまで続けてくることができています。大原ネットワークがそれぞれ進化を続けている後姿を追いながら、今回は「新生『大原芸術財団』」に学ぶことにしました。

大原孫三郎氏の孫の謙一郎様から曾孫の大原あかね氏にその代表も最近変わっています。あかね氏は先約があるということで、事務局長の森川政典氏に話していただきます。

もう一つの講義は、「高鍋バンドから茶臼原憲法へ ―石井十次の青春―」という題で、元北九州YMCA 総主事の安東邦昭氏にやっていただきます。安東氏は石井十次研究者で、今までも何度かセミナーで話をいただいています。今回はキリスト者石井十次がどう育まれたのか、といった話です。集大成だと張り切っておられます。私は、安東氏に『高鍋バンド』という言葉をあえて使い、その“存在”を調べてほしいともお願いしております。それにも答えてくださいました。おそらく研究者で「高鍋バンド」という言葉を使うのは、安東氏が初めてでしょう。

バンドで一番有名なのが、「熊本バンド」でしょう。明治の初めにできた「熊本洋学校」が迫害で閉鎖され、そこで学んでいた若者の一団が開校間もない同志社英学校に移り、新島襄の下で学ぶようになります。そのグループに対して、同志社の宣教師たちが「熊本バンド」と呼んでいたようです。群れとも訳せるようです。ちなみに私は「横浜バンド」の中心人物であったJ・C・ヘボンの作った「明治学院」で学びました。

この「熊本バンド」の青年たちは、その後、色んな分野で活躍するようになりますが、その中に徳富蘇峰がいて、金森通倫がいます。金森通倫は牧師として岡山に赴任すると、医学生石井十次に出会い洗礼を受けています。ついでに、金森氏の曾孫（母方）が現総理大臣石破茂氏です。

さあ「高鍋バンド」です。石井十次を岡山医学校へ行くようにすすめたのは、医師の荻原百々平（おぎわらどどへい）でした。クリスチャンではなかったけど、キリスト教への理解はかなり深かったと言われています。新島襄や小崎弘道（熊本バンド一員）は、明治12年に宮崎へ来ていますが、その招聘にも関わっているようです。小崎弘道は高鍋にも寄ります。石井十次はまだ少年時代でした。この頃はキリスト教を西洋の進んだ思想として感じ取る若者も多かったようですから、石井十次が岡山に出て行ってからも、次第に若者たちの間に醸成されていったのではないのでしょうか。高鍋は元々明倫堂によって志の高い若者を養成していた地、武士道にキリスト教を継ぎ木するじゃないけど、多くの若者の魂に火をつけたのではないか思うのです。私が一番気にしているのは、岡山孤児院の最初の頃の職員に高鍋出身の若者が多いということです。特に女性の活躍が目立ちます。岡山孤児院と関りながら、同志社に進んだ若者も少なからずいたという印象を私は持っています。

こういう所を、安東氏は、解明・整理してくださることでしょう。高鍋の歴史に関心を持つ人々にとっては、刺激的な発表になることでしょう。

ちょうどこの文章を書いている8月9日、長崎原爆の日、高鍋町石井記念明倫保育園内で、石井記念友愛社後援会「石井十次の会」高鍋・木城支部の結成集会が行われました。私は明治30年6月13

日、高鍋教会堂前で取られた一枚の写真を皆さんに示しました。32歳の若き石井十次とともに、当時の「高鍋バンド」の若者13名が精悍（せいかん）な表情で写っていました。

今、時代の大きな節目、新たな和・輪・環を作っていかなければなりません。石井記念友愛社は単なる一福祉施設ではなく、友愛の地域社会を作る、一つのバンド（群れ）でありたいと思います。皆様の御支援をお願い致します。